

令和7年度全国学力学習状況調査の結果

○教科に関する調査の結果

令和7年度に実施された「全国学力・学習状況調査」において、国語・算数・理科の教科調査及び児童質問紙による生活・学習状況の調査が行われました。本校児童の結果と分析についてお伝えさせていただきます。

総合結果

本校児童の正答率は、国語・算数ともに全国平均を約5ポイント上回る結果となり、一部の領域では10ポイント以上高い正答率も見られました。理科についても、基本的な知識の定着が見られる結果となりました。また、無回答率が低く、児童が最後まで問題に意欲的に取り組む姿勢が見られました。一方で、問題によっては回答に至らなかった箇所もあり、課題の読み取りや表現力の面で改善の余地がありました。

児童質問紙では、学習時間や家庭での過ごし方に関する設問に80パーセント以上が肯定的に回答しており、学習習慣の定着がうかがえます。また、将来の夢を持ち、自分のよさを実感している児童が多く、幸福感も高い傾向が見られました。ICT活用に関しても、教科の学びに楽しさを感じている児童が多い一方で、課題解決への意欲や生活習慣面では課題が見られ、今後の取組が求められます。

国語科より

国語では、児童が時間的な順序や事柄の流れを意識しながら、文章の内容を大まかに捉える力を身に付けられていることがわかります。また、事実・感想・意見などの関係を叙述から読み取り、文章全体の構成を把握する力も育まれています。

話し合いの場面を扱った問題では、話し合いの目的や登場人物の考えを的確に捉える力が見られ、これは日頃から授業での話し合い活動を取り入れている成果と考えられます。

一方で、自分の考えをもつことや他者の考えと比較しながら聞くこと、そしてそれらを基に自分の考えとしてまとめる力には課題が残りました。また、文章と図表を結び付けて必要な情報を見つける力については全国的にも課題とされており、本校でも同様の傾向が見られました。

今後は、自分の考えを伝えるだけでなく、互いのよさに気づき、新たな考えを見つけることができる話し合い活動を目指し、指導の工夫を進めていきます。さらに、話の内容を意図的に捉え、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめる力や、情報を選択し、他者の考えと結び付ける力の育成を大切にしながら引き続き取り組んで参ります。

算数科より

算数では、児童質問紙の結果から苦手意識を持つ児童もいる一方で、正答率の全国平均をおおよそ上回る結果が得られました。無回答率も低く、最後まで問題に向き合う姿勢が見られました。

「数と計算」の領域では、グラフから数値を読み取り、問われていることを理解し、計算

令和7月11月4日

京都市立朱雀第七小学校

校長 増田 茂樹



して、答えを導く力が特に高く、全国平均を上回る結果となりました。一方で、異なるグラフから目的に応じて適切なものを選ぶ力や、グラフから読み取った情報を言葉や数で理由づける力には課題が見られました。また、「図形」領域では、図形を構成する要素に着目して考察する力に課題が残りました。

基礎的な知識の習得はできているものの、既習事項を活用して考えを表現する力や、答えの根拠・過程を説明する力の育成が今後の課題です。分数については、数としての理解はあるものの、計算や数直線上での表現に課題が見られました。

理科より

理科では、電気・磁石・花のつくりなどの基本的な知識は定着しており、児童が日々の授業で学んだ内容を理解していることが確認されました。しかし、実験や観察の結果から結論を導き出す力や、考察する力には課題が見られました。これは、理科の学習活動において、知識と活動を関連付けて理解を深める力を育成していくことが大切であることを示しています。

今後は、観察・実験の結果や結論を図に整理したり、言葉で説明したりする活動を通して、知識と体験を結び付けた深い理解を促していきます。

◎児童質問紙から見える子どもの様子



自己肯定感と将来の展望

多くの児童が「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持っている」と肯定的に回答しており、自分自身を前向きに捉え、未来に希望を持っている児童が多いことがわかります。また、「先生は自分のよいところを認めてくれている」と感じている児童も多く、自己肯定感や将来の展望を実感していることがわかります。

他者との関係性と社会性

「人の役に立つ人間になりたい」「困っている人を進んで助けている」と回答した児童が多く、他者への思いやりや社会貢献への意識が高いことが示されました。学校生活の中で、互いのよさを認め合い、助け合う風土が育まれていると考えられます。

学習への意欲と課題

学習時間や家庭での過ごし方については、多くの児童が肯定的に回答しており、学習習慣の定着が見られます。また、教科の学びにおいてICTを活用することに楽しさを感じている児童も多く、新しい学びのスタイルに前向きな姿勢が見られました。

今後の教育活動の方向性

一方で、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「分からないことがあったときに自分で学び方を考え、工夫できる」といった設問では、肯定的な回答が少なく、主体的・協働的な学びへの実感が不足している傾向が見られました。また「学校に行くのが楽しいと思うか」についても同じ傾向が見られました。この結果を真摯に受け止め、学校での学びについて「話し合い活動の充実」「探究的な学びの導入」「学びの意味付け」「学校生活の魅力づくり」など、児童がより主体的に学び、互いに高め合える学習環境づくりを進めて参ります。